



御悩さん

『御悩さん』第18号

平成 26年 8月

発行 亀山本徳寺内・本徳寺廟所墓地管理部  
姫路市亀山三三四・079-2351-0242

編集 亀山本徳寺内・真宗文化研究室

## 『ナイオン』ということ

本堂の外陣正面に正座すると、内陣巻障子の上部に金泥で書かれた、大型の扁額に気づく。右から『泥』『洄』『殿』と書かれ、ナイ・オン・デンと読む。この扁額は、この本堂が明治六年に本山より移築されたとき、本願寺第二十世広如上人によって墨書されたものである。ナイオンとは何を意味するのか。讚仏偈の内に「道場超絶 国如泥洄 而無等双」とある。「クニはナイオンのごとし」と読める。クニとは仏国浄土を示す。『涅槃』と同義語で梵語ニル・ヴァーナの音訳である。涅槃とは、有情の心中で燃えさかる煩惱、なかでも三大煩惱として貪・怒り・無知が定番である。涅槃はこの煩惱の炎が吹き消されたことを意味する。

しかるに煩惱とは何か。サンスクリットによれば、「汚れた心」「苦しむ心」というのが煩惱の原意である。総じて、われわれを悩まし害し誤呈に導く不善の心を煩惱と呼んでいる。つまり誰でも所持している、心の構造と機能である。

大乘・唯識では心の構造を説明するに当たって、さまざまな種類の煩惱が究明されている。貪（貪欲）、瞋（瞋恚）、痴（愚痴）、慢、疑、悪見の六種の根本煩惱と、そこから付随的に生起する忿（忿）、恨、覆、惱、嫉（シツ）、慳（ケン）、誑（オウ）、諂（テン）、去（キョウ）、害、無慚（ムザン）、無愧（ムギ）、求沈（コンジン）、掉挙（ジョウコ）、不信、懈怠（ケダイ）、放逸、失念、散乱、不正知（フシヨウチ）の二〇種の随煩惱が突き止められている。このうち貪（むさぼり）、瞋（いかり）、痴（無知）の三つは三毒といわれ、われわれの心を汚し毒する三大煩惱である。そこから、煩惱という心的

性向をガイドに業（行為）が展開し、煩惱と業とが相互動因となって生（苦的生存）が結果するという生死輪廻の因果構造を明らかにする。煩惱のうちでも痴は無明（むみょう）といわれ、仏の智慧に疎知的な心の汚れであり、これが根源的要因となって他の煩惱が派生し、業と絡み合って迷いの心が生ずるとみるところに仏教の煩惱論の特徴がある。

このような仏教の精緻な心の構造分析からみると、生きている人間の営みのなかで煩惱以外のところを見いだすことは困難である。いつでもどっぷり煩惱界に浸かっているようだ。煩惱のなかでも特に、貪（むさぼり）、瞋（いかり）、痴（無知）の三つは要注意だ。まずは「貪（むさぼり）。どん欲とか執着とか言うが、要するに「もつともつ」との心だ。いい方に「もつともつ」とだといいが、突き詰めてみるとたいがいはその根底に我利我欲という魔性が隠蔽されている。

我々の社会の原動力はこの「もつともつ」とからなりたっている。生活は昔に比べて比較にならないくらい便利になったのに、「もつともつ」だから、一向に充足感がない。かえって不足感がつり悩まされつづける。これを餓鬼道と言っ

次は「瞋（いかり）だ。私などはしょっちゅうこの危険に悩まされる。自分の考えや行為が一向に相手に通じない時、実に不愉快になる。自分が当然正しく相手が当然間違っているという偏見に囚われると、相手が横柄な態度を示したときスグ切れる。また、相手に自分の本当の欠点を指定されたとき、自分の足かがりやを失うことになるから、もう怒りによってしか対応できない。怒りが一度堰を切ると暴力となる。結局怒りが怒りを呼び連鎖的にエスカレートして破局を迎える。これを畜生道と言う。お断りしておきますが、実際の畜生（アニマル）達は自然の共生則によって生きているのでそんな馬鹿なことはありません。

最後は「痴（無知）だ。これは前二者とは着眼点が異なり、少しわかりにくい煩惱だ。しかし、すべての煩惱の根元がここにある。一言で言ううと仏の智慧に限りなく近い心性をいう。